

【資料】

ラテン教父の総合研究(8)
キュプリアヌス著
『フォルトゥナトゥスに与う
——殉教のすすめについて』
CYPRIANUS, AD FORTUNATUM,
DE EXHORTATIONE MARTYRII.
——翻訳と注解——

吉 田 聖

目 次

1. はじめに
2. 本論
 - 第1部 キュプリアヌス著『フォルトゥナトゥスに与う』
I~IV まで、全部で4章、「まえがき」の部分。
 - 第2部 キュプリアヌスによる、後続の著『殉教のすすめ』の要約
I~XII まで、全部で12項目、「要約」または「目次」の部分。
 - 第3部 キュプリアヌス著『殉教のすすめ』
I~XIII まで、全部で13章、「本論」の部分。
ただし、第13章は「あとがき」に相当（著者の追加）
3. おわりに

1. はじめに

1. 殉教者という単語の元の意味について

本書で「殉教者」と訳されている元の単語は、一般的には、「証人」
a witness を意味するラテン語の martyr, martyris, m. f. である。これは、
語源的には memor（「記憶している」）に関連したギリシャ語 martus に由

来している。欧米の現代諸言語、例えば、英語 martyr, フランス語 martyr, ドイツ語 Maertyrer, イタリア語 martire, スペイン語 martir 等も同じ語源である。「殉教」という訳語も同様に、ラテン語では martyrrium, i. n. 英語 martyrdom, フランス語 martyre, ドイツ語 Martyrium または Maertyrertum, イタリア語 martirio, スペイン語 martirio で、共通の語源に基づいている。因みに、キュプリアヌスはその全著作中で、martyr という単語を 41 回（本書では最多の 18 回）、martyrium を 29 回（本書では 9 回）使っている⁽¹⁾。

参考までに、日本語の漢字「殉教」という単語を分析してみると、まず、「殉」という文字には、左側の「歹（ガツ）」偏の「人の白骨死体」の象形（「死」に関する漢字ができていた）と、右側の「旬（ジュン）」の「音」に「ひとめぐり・従う」「主君の死にしたがって死ぬ・命がけで従う」の意が含まれている。「殉教」「殉死」「殉職」「殉国」などの熟語として広く一般的に使用されている。また「教」の字は左側で「子どもと交わるさま」をしめし、「強いて子どもと交わりて導く・教える」の意、とある⁽²⁾。

殉教という単語が、聖書の中で用いられる場合、上記の「証人」の内容がより厳密に規定されて、キリスト教の伝統では次のような意味あいになっている。

「語源的に言えば、歴史・法律・宗教のいずれの分野を問わず証人を意味する。しかし、キリスト教の伝統のなかで確立された用法に従えば、もっぱら血による証を立てた者だけをさす言葉である。このような用法は、すでに新約聖書のなかでも実証することができる（使 22, 20；黙 2, 13；6, 9；17, 6）。つまり、殉教者とは、正確に言えば、『イエス・キリストを忠実に証明するために生命をささげた人』という意

(1) Cf. Cyprien, *Traites concordance Documentation lexicale et grammaticale*. I. Ed. P. Bouet, Ph. Fleury, et al. Olms-Weidmann. 1986.

(2) 真藤建志郎『偏旁冠脚の字典』（日本実業出版社、1989年）参照。

味である」⁽³⁾。

他にも、例えば、「神の証人」「信仰の証人」というような用法もあげられる。「キリストは父である神のみ旨を果たすために自らをいけにえとしてささげ、あらゆる侮辱や苦しみ、嘲笑を忍び、沈黙を貫き、十字架上の死によって、自らの生命をささげた。そして、自分を死に追いやった人々をゆるし、彼らのために祈った。この態度こそ、後に続く殉教者の模範であり、原型となった。

従って、キリスト教では**信仰の理由**で、**苦しみを耐え忍び**、または**殺害された者**だけを「**殉教者**」と呼んで称える。殉教という事実が、人々にその信仰を持つように促し、強くはたらきかけるのである。政治的な信条等のゆえに殺害された犠牲者は、**殉教者**とは見做されない⁽⁴⁾。

また、テルトゥリアヌス著『アポロジエティクム』(Q. S. F. Tertullianus, 155/160~220, *Apologeticum*, 50)には、**殉教者**を称えるラテン語の有名な句がある。

“Plures efficimur quoties metimur a vobis, semen est sanguis Christianorum.”

英訳：As often as we are mown down by you, the more we grow in numbers; the blood of Christians is the seed.

試訳：「あなたがたによって殺害されるたびに、われわれは増えていく。キリスト教徒の殉教の血は、種である」。

ところで、**殉教者**といえは、日本にもすでにたくさんの事例があるが、その中でも、「**日本 26 聖人殉教者**」が有名であり、また 1997 年はその「400

(3) 『聖書思想事典』(三省堂、1973年)参照。下線は訳者の強調点。

(4) 前掲書参照。下線は訳者の強調点。

年祭」記念の年にあたっている⁽⁵⁾。このよき機会にあたり、私は、殉教をテーマに取り上げているキュプリアヌス著 *Ad Fortunatum, De Exhortatione Martyrii*。『フォルトゥナトゥスに与う——殉教のすすめについて』(以下、『殉教のすすめ』または本書と略す)を研究対象に選び、その翻訳を『南山神学』(第21号、1998年2月号)に紹介することにした。実は、彼のもう一つの著作で一般読者向けにも興味深いテーマ、『嫉妬とねたみについて』も研究し、南山大学の学術誌『アカデミア』(文学・語学編、第63号)にすでに翻訳発表した(1997年9月発行)。「殉教のすすめ」は、アフリカ初の殉教者・聖キュプリアヌス司教がフォルトゥナトゥス司教(彼の名前に因んで本書のラテン語名の略語は、FOと略される)に与えた「激励の書」である。数年後にキュプリアヌス自身も捕えられ、追放され、やがて殉教の栄冠を手にする(西暦258年9月14日、58歳頃)。

本書が日本26聖人殉教400年記念を祝う人々にとっては「心の糧」となり、また信仰生活の向上に励む人々には、回心に役立つヒントや手がかりとなり、さらにまたキリスト教に関心のある人々には殉教者、「信仰の証人」を正しく理解するための一助となれば幸いである。

2. 本書の名称、作成時期等について

- (1) 本書の名称等。『フォルトゥナトゥスに与う——殉教のすすめについ

(5) 1597年(慶長2年)2月5日、長崎・西坂の丘で、26人のキリスト教徒が信仰の証をたて、尊い命を捧げた。実に、京都から約1000キロの道のりを約1か月かけて徒歩で迎り着き、そこで殉教を遂げたのである。26人中、外国人6人、日本人20人(そのうちの17人は信徒)、修道士9人、司祭3人。中でもその年令の若さがひとときわ目につく。ルドビコ茨木は12歳(今なら小学6年生)、ガブリエルも、ヨハネ五島も19歳(今なら大学1年生)、フィリポ・デ・ヘヌスは24歳、ヨハネ網屋は28歳、パウロ三木は33歳など。職業も様々であるが、皆思いを一つにして、長崎への道を歩み通して殉教したのである。265年後の1862年、教皇ピオ9世により、この26人殉教者は「聖人」の位にあげられた。ちなみに、日本にはこの他にも「福者」殉教者が合計205人いる(1867年7月7日に列福、9月10日が記念日)。

て』の2つの題名が付いているために、一見、2冊の別々な著作と思われるがちである。内容的には、第1部『フォルトゥナトゥスに与う』は、I～IVまでの全体4章の短い「まえがき」（底本にも、PRAEFATIO.「序文」と明記されている）である。ただし、各章とも「小見出し」は付いていなかったもので、内容紹介のため、訳者が作成、付記した。第3部『殉教のすすめ』は本論（全体はI～XIIIまでの全13章）である。さらにまた、第1部と第3部の間に、第2部『殉教のすすめ』の「要約」（CAPITULA LIBRI SEQUENTIS. という表題のもとに、長短様々、12項目の「要約」や「目次」に相当する文章）が挿入されている。この部分は、順序どおり翻訳し掲載しておいた。第3部『殉教のすすめ』の各章には、珍しく、底本にラテン語の「小見出し」が付いているので、訳出して付記することにした。この『殉教のすすめ』の本論部分は全部で13章までであるのに、その直前の第2部「要約」には12章分しか書かれていない（第11章の長さは、どういう訳か、他の章に較べて4～5倍以上にもなっている）。第12章の冒頭に、「最後に」と記している点などからみても、結局、最後の13章は、「あとがき」のつもりで、著者が追加したのかもしれない。とにかく、本書は題名からみれば「2部構成」、構成全体からみれば、「3部構成」となっている。しかも「小見出し」付の3部構成は、今まで研究・翻訳してきた彼の著作、合計9冊中でもユニークであり、また初めてのことである。

(2) 作成の時期。10年間の彼の司教時代（西暦248～258年）の間の「初期の250年～252年頃だ」とする意見と、「殉教直前の256～257年頃に書かれたものだ」とする意見に別れているらしい。昔の著作には、作成年月日等が記載されていない場合が多いので、特定するのが困難なものも、止むを得ないことかも知れない。いずれの場合も、彼の著作である点については、疑いの余地がない。

(3) 表題の人物、Fortunatus フォルトゥナトゥスについて。

ドイツ語の神学事典 LEXIKON FUER THEOLOGIE UND KIRCHE によれば、この名前は初期アフリカ教会文献（文学や殉教記録）中に頻繁

に見受けられる。キュプリアヌスはその書簡の中で彼を副助祭と呼んでいる(書簡 34, 4; 35; 36, 1)。西暦 256 年開催の「カルタゴ教会会議」の参加者名簿には、彼の名前がトゥッカボリ (Thuccabori. 訳注。別書にはトゥッカ *Tucca*) の司教として記されている(書簡 44; 45, 1; 67; 70)。本書『フォルトゥナトゥスに与う——殉教のすすめ』は、殉教に関する旧約・新約聖書の言葉を編集した著作であるが、かねてからの彼の依頼に応えるかたちで、この司教宛にキュプリアヌスから献呈されたものである⁽⁶⁾。

(4) その他。今回使用した底本は、前回同様、J. P. MIGNE, PATROLOGIAE LATINAE TOMUS IV, S. CYPRIANUS, 678~702 (1865) である。各頁ごとに、① “*Variae Lectiones.*” (種々の写本の相違比較・参照箇所) と、② “*Steph. Baluzii notae.*” (「ステファノ・バルジウスの脚注」合計 50 か所の「ラテン語原文に関する原典脚注」) が掲載されている。両者とも文献学的には重要なものであり、説明・解説等も長短様々ではあるが、一般読者には余り関心も高くないと思われる。そこで、枚数制限も考慮して、今回は「ステファノ・バルジウスの脚注 (50 か所分)」のみを「原注」として末尾に簡潔に紹介することにした。「脚注」は各頁下に、また聖書の引用箇所等の典拠・参照箇所および「訳注」は() 付で、補足箇所等は [] 付で、本文中に収めることにした。なお、キュプリアヌスのラテン語原文の各章には、アラビア数字ではなくローマ数字 (I, II, III.) が使われていたので、本文中にも、それを各章に用いることにした。

(6) Cf. Fortunatus, in LEXIKON FUER THEOLOGIE UND KIRCHE, VIERTER BAND, VERLAG HERDER FREIBURG, (1960) 参照。

2. 本論

第1部 キュブリアヌス著

『フォルトゥナトゥスに与う』（「まえがき」¹⁾）

第1章 殉教のすすめは急務である。信徒の信仰を堅固にするための聖書のことば。

親愛なるフォルトゥナトゥスよ。あなたはこれまで²⁾願ってきましたが、実に迫害と苦難の重荷が迫ってきた今、そしてこの世の終わりと完成成就を迎え、反キリストの憎むべき時がすでに始まっていますので、私は兄弟たちを励まし〔殉教の〕準備を整えるために、聖書のすすめの言葉をここに集めてみたいのです。こうして、天国への霊的な戦いに備えるように、キリストの兵士たちを元気づけたいと思っています。あなたの願いは必要に迫られたものでしたので、従わないわけにはいきません。私の限られた力でも、神のインスピレーションの助けをいただいて教えられれば十分です。これから戦いに出ようとしている兄弟たちのために、それは神の掟よりの、言わば戦闘用の武器、防御用の武具となるでしょう。私が信徒の信仰を堅固なものにしなければ、そして聖書の読書によって、神に奉献された信徒たちの〔勇気の〕価値が固められなければ、私の呼びかけの声に日覚め〔奮起する〕神の民も少ないからです。

第2章 戦いをいどむ相手、それは敵対者、悪魔。

しかし、悪魔の投槍等の武器に対抗するために、天の〔神の〕陣営内に組織された軍隊であり、神から私に委ねられた民である人々を、熱心な激励の言葉によって整える以上に、私の配慮と世話にふさわしく、よくあてはまるものが他にあるでしょうか。何故なら、人は先ず最初に野原で訓練を受けなければ、戦場に適した兵士にはなれません。また、人は先ず最初に自分の力を使い、技術を身につけることを考えなければ、競争場での栄冠を手に入れることはできません。

私たちが戦いをいどもうとしている相手、それは昔からの敵対者、悪魔

です。悪魔の最初の人間攻撃から今や約 6000 年が経過しました(訳注。この数字は、年代を意味してはいない)。人を転覆させるための、悪魔のありとあらゆる誘惑、技巧、罫等は悪魔が長い年月をかけて実践して学んだものなのです。もしもキリストの兵士が準備なしの状態²⁾(訳注。あとで「原注」に追加したらしく、3ではなく、2'となっている)、訓練を受けていない状態で、心こめて注意深く警戒していない状態で彼〔悪魔〕に見つかるならば、この無知な者は取り囲まれ、この不注意な者は騙され、この無防備な者はあざむかれるのです。しかし、もしも人が神の掟を守りながら、キリストに勇敢に従い³⁾、悪魔に対してしっかりと対抗するならば、悪魔は征服されねばならないでしょう。何故なら、その人が信仰宣言するキリストは、決して「征服されることのない方」だからです。

第 III 章 神のみ言葉に基づく「ふだん着」を作りなさい。

親愛なる兄弟よ、私はこの話を長々と引き延ばさないために、つまり、この複雑な文書で聴衆や読者を疲れさせないために、以下のような「要約」を作ることにしました。標題が先ず提示されますが、それはだれもが教えを知り、心にとどめておくためです。そして、主のみ言葉を付記し、神の権威に基づいた私の考えを述べることにしました。こうして、他の説教者たちに材料を送ったと思われるよりも、私自身の考えをあなたに送ったのだと思われないようにしたかったのです。以下の材料は個人的に使用するとひじょうに大きな利益をもたらします。というのも、もしも私がすでに「ちゃんと出来上がった衣服を」人にあげたとすれば、それは他の人がすでに着用していたことのある私の衣服です。よその人の身長や体型に合わせて作られたその衣服は、もらった人にはあまり合わないでしょう。

しかし、いま私は、私たちが救われ、生かされている小羊〔キリスト〕よりいただいた純毛の、「紫の衣」(黙 7:14 参照)を送りました。あなたはそれを受け取り、自分の好きなように衣服を作ることでしょう。さらに、あなたの「普段着⁷⁾」として、自分固有の衣服として喜ぶことでしょう。そ

して他の人々のためにも作ることができます。私たちが送ったものをあなたに彼らに提示することで、彼ら自身も自分の好きなように衣服を作ることでしょう。こうして、昔は裸であった者は衣服で被われ、彼らはすべて「キリストの衣」、天の恵みによる「聖化の衣」を着ることになるでしょう。

第 IV 章 第二の洗礼である殉教への準備を。

親愛なる兄弟よ。さらにまた、この〔殉教への〕すすめは、殉教者をつくり出すために不可欠なもので、役に立ち有益な計画であると、私は考えてきました。〔ぐずぐずと〕遅延したり、〔だらだらと〕緩慢な内容は私の言葉から取り除かねばなりません。人間的な回りくどい話を除去し、神が語られる事柄だけを記すべきです。これは、殉教に向けてしもべたちを励ましている「キリストの言葉」なのです。神の掟そのものが、あたかも武器のごとく、戦う人々に与えられなければなりません。それは「進軍ラッパ」の激励となり、戦闘者には「戦闘開始のラッパ」とならなければなりません。そのとき〔このラッパが響きわたることによって〕耳は覚まされ、〔そのとき〕精神は整えられ、〔そのとき〕心身の力はあらゆる苦難を耐え忍ぶように鍛えられなければなりません。

神のおゆるしを得て、信徒に「第一の洗礼」を授けましたが、このたびは各々に「第二の洗礼」の準備をさせなければなりません。そして以下の事柄を教え諭しておきたいと思えます——即ち、これは、恵みにおいては「より偉大な洗礼⁽⁷⁾」であり、権能においては「より崇高なもの」、榮譽においては「より貴重なもの」です。これは、天使たちが授ける洗礼であり、

(7) 「普段着」と訳出したのは、in Domestica tua. という単語。ここでは、Domestica と大文字で書かれているので「」付にしておいた。この単語は、domesticus, a, um. adj. (英語 domestic の語源) という形容詞 (domus, us, f. 家、英語 dome と関連がある) で、「室内着」を指す。日曜日の教会儀式参加のみの「晴れ着の信仰」に対比して、信仰の恵みの日々の実践を強調して、「普段着の信仰」という表現が、たびたび今日でも使われている。実に、聖性の完成のためには、日々つつとめと愛の実践が不可欠である。

また神とキリストが歓喜してくださる洗礼です。これは、受洗者が以後だれも罪を犯さない洗礼であり、私たちの信仰を増し、完成する洗礼です。これは、この世から退きつつある私たちを、直ちに神と結びつける洗礼です。「水の洗礼」においては罪のゆるしが受けられましたが、「血の洗礼」[殉教]においては善徳の栄冠がいただけるのです——と。これは歓迎[の抱擁]を受けるべきもの、待ち望まれるべきもの、そして私たちのあらゆる懇願の祈りにおいて、乞い求められなければならないのです。それは、いま「神のしもべ」である私たちが、やがて「神の友」にもなるためです……。

(以上、キュプリアヌス著『フォルトゥナトゥスに与う』全4章、「まえがき」おわり)

第2部 キュプリアヌスによる後続の著 『殉教のすすめ』の要約(12項目)

I. 兄弟たちに対して[殉教に関する]激励や準備を促すために、さらに主に対して信仰宣言するために、また迫害と苦難の戦いのために、善徳と信仰を強固なものにして武装させるために、まず最初に言うておかなければならないこと、それは即ち「偶像は神ではなく、人間が作ったものに過ぎない」ということです。何故なら、作られた物[偶像たち]は、製造者よりも偉大ではないからです。この偶像は誰かを守ったり保護したりできず、むしろ人間が保存してやらないと、その神殿から自分で崩れ去っていくものです。さらに、神の計画と掟に従って、人間に奉仕すべき諸要素⁵⁾なども、崇拜されるべきものではありません。

II. 偶像は破壊され、諸要素に関する真理が証明されてから、神のみを礼拝すべきことが示されなければなりません。

III. その後、偶像に犠牲を捧げた者に対する神の威嚇はどういうものかを、追加しなければなりません。

IV. さらに、偶像崇拜者を神は容易にゆるされないことを、教えなけれ

ばなりません。

V. そして、偶像に犠牲を捧げたり、仕えたりするように説得する者を殺すように命じるほど、神は偶像崇拜者に激怒されるのです。

VI. 次に、付け加えなければならぬのは、このことです。即ち、キリストの血によって救われ、生かされている私たちは、何もキリスト [への愛] より優先すべきではない、ということです。何故なら、キリストは何にもまして私たちを優先して [愛して] くださったのです。主は私たちのために、良いものよりも悪いものを選び取られ、富よりも貧しさを、支配よりも服従を、永遠よりも死を選び取られたのです。しかし私たちはこれとは逆に、苦難のさなかにあつて、この世の貧困よりも天国の富を選び取り、この世の一時的な奴隷状態よりも永遠の支配と王国を、死よりも永遠不滅を、悪魔と反キリストよりも神とキリストを選び取ったのです。

VII. また、教えなければならぬことは——悪魔の毒牙から救われ、この世の罠から逃れて自由になった者は、かりに艱難や困難に直面しはじめても、この世に再び引き返そうと望むならば、この世からすでに退いて [獲得した] 利益を失ってしまう、ということです。

VIII. 勝利の栄冠を獲得するために、さらに力説しておかねばならないのは、信仰と善徳を、そして天上的・霊的な恵みの完成成就を堅持しなければならぬ、ということです。

IX. というのも、この目的を成就するためにこそ、この苦難や迫害が到来し、私たちは試されるのです。

X. 迫害の不正や処罰⁶⁾ を恐れるべきではないこと。というのも、攻撃する悪魔よりも、保護してくださる神のほうが偉大な方だからです。

XI. この世が私たちを憎み、敵対して迫害を起こすことなどは、すでに預言されていたことを明らかにしなければなりません。この世で受ける苦難や迫害に、誰も驚いたり、困惑したりすることがないためです。迫害が起こるのは、まさにこの憎悪からなのです。そしてやがて続いてくる報いや褒美において、神の約束が真実であることが証明されるのです。このこ

とがキリスト教徒に生じるのは新しいことではありません。この世の初めから善人が苦しめられ、邪悪な者によって虐待されたり、殺害されたりしてきたのです。

XII. 最後に、この世での奮闘や苦難ののちに、どのような望みや報いが正しい者や殉教者を待ち受けているかを書き記し、また苦しみにおいて受けたものより、苦しみの報いにおいて受けるもののほうがはるかに大きいものであるということも、書き記しておかねばなりません。

(以上、キュプリアヌスによる『殉教のすすめ』の要約、全12項目、おわり)。

[訳注。後続の『殉教のすすめ』には、第XII章の次に、第XIII章もある。これはキュプリアヌス自身の「あとがき」とみなすことができる]。

第3部 キュプリアヌス著『殉教のすすめ』

第1章 偶像⁷⁾は神々ではないこと、またその諸要素も神の代わりに礼拝すべきではないこと。

詩編135編中に、こういうふうに書き記されています。「国々の偶像は金や銀にすぎず、人間の手が造ったもの。口があっても話せず、目があっても見えない。耳があっても聞こえず、鼻と口には息が通わない。偶像を造り、それに依り頼む者は皆、偶像と同じようになる」(詩135:15-18参照)。同じように、ソロモンの知恵にもつぎのように記されています。「諸国民の偶像をみな神々と見なした。その偶像は、目があってもみることができず、鼻があっても息ができず、耳があっても聞くことができず、手に指があっても触ることができず、足があっても歩くことができない。偶像を造ったのは人間、霊を貸し与えられている人間がそれを造った。人は、自分に等しい神をさえ造れないのだ。死すべき人間が、その不法の手で造り出す偶像には、命がない。拜まれる偶像より、人間の方が価値がある。人間には命があるが、偶像にはないからだ」(知15:15-17参照)。同じく出エジプト記にも「あなたはいかなる偶像も、似姿も造ってはならない」(出20:4

参照)とあります。さらにソロモンも諸要素についてこう述べています。

「彼らは作品を前にしても作者を知るに至らなかった。かえって火や風や素早く動く空気、星空や激しく流れる水、天において光り輝くものなど⁸⁾を、宇宙の支配者、神々とみなした。その美しさに魅せられて、それらを神々と認めたなら、それらを支配する主がどれほど優れているかを知るべきだった。もし宇宙の力と働きに心打たれたなら、天地を造られた方がどれほど力強い方であるか、それらを通して知るべきだったのだ」(知 13: 1-4 参照)。

第二章 神のみ⁹⁾を礼拝すべきである

[聖書には] こう書き記されています。「あなたの主である神を拝み、主のみ仕えなさい」(申 6: 13 参照)。また出エジプト記には「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」(出 20: 3 参照)とあります。また、申命記には「しかし見よ、わたしこそ、わたしこそそれである。わたしのほかに神はない。私は殺し、また生かす。わたしは傷つけ、またいやす。わが手を逃れうる者は、一人もない」(申 32: 39 参照)。さらに黙示録には「わたしはまた、別の天使が空高く飛ぶのを見た。この天使は、地上に住む人々、あらゆる国民、種族、言葉の違う民、民族に告げ知らせるために、永遠の福音を携えて来て、大声で言った。『神を畏れ¹⁰⁾、その栄光をたたえなさい。神の裁きの時が来たからである。天と地、海とそこにあるすべてのものを創造した方を礼拝しなさい。』」(黙 14: 6-7 参照)。主もまた福音書の中で、第一と第二の掟について話されたとき、次のように言われました。「『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、[思いを尽くし、]力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』(マコ 12: 29-30 参照)。これが第一の掟であり、第二の掟は、これに似ている。『隣人を自分のように愛しなさい』。律法と預言者は、この二つの掟に基づいている」(マタ 22: 39, 40 参照。原文中には、22: 48 とある)。さらに、「永遠の命とは、唯一のまことの神

であるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」(ヨハ 17:3 参照)。

第三章 偶像に犠牲を捧げた者に対する神の威嚇

出エジプト記には「主ひとりのほか、神々に犠牲をささげる者は断ち滅ぼされる」(出 22:20 参照)とあります。申命記には「彼らは神ならぬ悪霊に犠牲をささげた」(申 32:17 参照)と記され、イザヤ書も「[この国は偶像に満たされ、手の業、] 指の造った物にひれ伏す。人間が卑しめられ、人はだれも低くされる。わたしは彼らを赦さない」(イザ 2:8-9 参照)。さらに、「主は言われる。お前たちは彼らに犠牲をささげ、彼らに献げ物をささげた。わたしがそれらを容赦すると思うのか？」(イザ 57:6 参照)。エレミヤ書には「他の神々に従って行くな。彼らに仕え、ひれ伏してはならない。お前たちの手が造った物で[わたしを怒らせるならば、]わたしはお前たちに災いをくだす」(エレ 25:6 参照)とあります。黙示録中にも「だれでも、獣とその像を拝み、額や手にこの獣の刻印を受ける者があれば、その者自身も、神の怒りの杯に混ぜものなしに注がれた、神の怒りのぶどう酒を飲むことになり、また、聖なる天使たちと小羊の前で、火と硫黄で苦しめられることになる。その苦しみの煙は、世々限りなく立ち上ぼり、獣とその像を拝む者たちは、[また、だれでも獣の刻印を受ける者は、] 昼も夜も安らぐことがない」(黙 14:9-11 参照。原文には 15:9-11 とある)。

第四章 偶像崇拜者を神は容易にはゆるされない

モーセは出エジプト記の中で民のために祈っていますが、聞き入れられません。彼はこう言います。「『ああ、この民は大きな罪を犯し、金の神¹⁾を造りました。今、もしもあなたが彼らの罪をお赦しくださるのであれば……。もし、それがかなわなければ、どうかこのわたしをあなたが書き記された書の中から消し去ってください』。主はモーセに言われました。「わたしに罪を犯した者はだれでも、わたしの書から消し去る」(出 32:31-33

参照)。エレミヤも民のために懇願して祈ったとき、主は彼にこう言われました。「あなたはこの民のために祈ってはならない。彼らのために嘆きと祈りの声をあげてはならない。災いのゆえに、彼らがわたしを呼び求めてもわたしは聞き入れない」(エレ 11：14 参照)。エゼキエルも神に対して罪を犯す者への神の怒りを宣告してこう述べています。「主の言葉がわたしに臨んだ。『人の子よ、もし、ある国がわたしに対して不信を重ね、罪を犯すなら、わたしは手をその上に伸ばし、パンをつるして蓄える棒を折り、その地に飢饉を送って、そこから人も家畜も絶ち滅ぼす。たとえ、その中に、かの3人の人物、ノア、ダニエル、ヨブがいたとしても、息子も娘も救うことなく自分自身の命を救うだけだ』」(エゼ 14：12-14 参照)。またサムエル記上にも同じく「人が人に罪を犯しても、人々が神に祈ってくださる。だが、人が神に罪を犯したなら、誰が執り成してくれよう？」(サム上 2：25 参照)。

第V章 神は偶像崇拜者に激怒される

申命記にはこう記されています。「あなたの兄弟、息子、娘、愛する妻、あるいはあなたの魂と同じである親友に、『あなたも先祖も知らなかった他の神々に従い、これに仕えようではないか』とひそかに誘われても、誘惑する者に同調して耳を貸したり、憐れみの目を注いで同情したり、かばったりしてはならない。彼について宣言しなければならぬことを宣言しなさい。彼を殺すには、まずあなたが手を下し、次に、民が皆それに続く。あなたの神、主から離して迷わせようとしたのだから、彼を石で殺さねばならない」(申 13：6-11 参照)。主は再び語って言われる。「たとえ住民全体が偶像崇拜に同意したとしても、その町はゆるすべきではない(この文章は新共同訳には載っていない)。あなたの神、主があなたに与えて住ませるどこかの町のうわさとして、『お前たちの知らなかった他の神々に従い、これに仕えようではないか』と言うのを聞いたならば¹²⁾、その町の住民を皆剣にかけて殺し、町を火で焼き払いなさい。その町はとこしえに廃墟

となって、再び建てられることはない。あなたの神、主の御声に聞き従い、その戒めを守るならば、主は激しい怒りをやめ、あなたに憐れみを垂れ、あなたの数を増やされる」(申 13：12-18 参照。キュプリアスによる抜粋箇所)。この戒めと効力を覚えていたマタティア Mattathias は、[モディンの異教の神に] 犠牲をささげようとして祭壇に近づいてきた者 [ユダヤ人] を殺しました (I マカ 2：24 参照)。

キリストの到来以前に神礼拝と偶像崇拜に関するこのような戒めが遵守されていたのです。キリスト到来後はなおさら遵守されなければなりません。[この世に] 到来された主はただ言葉だけでなく、行動をもって激励されました。あらゆる不正と侮辱とを耐え忍び、ついには十字架に掛けられました。それは私たちも [同じように] 苦難を耐え忍び、そして死ぬことを、主自ら模範を示して教えるためでした。さらにまた主が私たちのために苦難を耐え忍ばれたのですから、私たちが自分のために苦しみを耐え忍べないという弁解など出来なくするためでもありました。主は他の人々の罪のために苦しみを耐え忍ばれたのですから、なおさらのこと私たち各々は自分自身の罪のために苦しみを耐え忍ぶべきではないでしょうか。それゆえ福音書は次のように戒めて言っています。「だから、だれでも人々の前で言い表す者は、わたしも天の父の前で言い表す。しかし、人々の前でわたしを否む者は、わたしも天の父の前で否む」(マタ 10：32-33 参照)。

同様に、使徒聖パウロも「わたしたちは、[キリストと] 共に死んだのなら、[キリストと] 共に生きるようになる。耐え忍ぶなら [キリストと] 共に支配するようになる。[キリストを] 否むなら、キリストもわたしたちを否まれる」(II テモ 2：11-12 参照) と言っています。また、ヨハネも「御子を認めない者はだれも、御父に結ばれていません。御子を公に言い表す者は、御子と御父に結ばれています」(I ヨハ 2：23 参照)。このように主は死を軽んじるように私たちを励まして、次のように言われました。「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地

獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」(マタ 10:28 参照)。そしてまた「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って¹³⁾ 永遠の命に至る」(ヨハ 12:25 参照)とされています。

第VI章 キリストの血によって^{あがな}贖われ生かされている者は、何もキリストへの愛より優先すべきではない

福音書で主はこう語って言われます。「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。また、自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない¹⁴⁾」(マタ 10:37-38 参照)。そして、申命記にもこう書き記されています。「彼らは自分の父母について『わたしは彼らを顧みない』と言い、自分の息子さえも無視し、あなたの仰せに従い、契約を守った」(申 33:9 参照)。さらに、使徒聖パウロは言います。「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。『わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ¹⁵⁾、屠られる羊のように見られている』と書いてあるとおりです。しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています¹⁶⁾」(ロマ 8:35-37 参照)。そしてまた、「あなたがたは、もはや自分自身のものではないのです。あなたがたは、高い代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい」(I コリ 6:19-20 参照)とあり、さらに「キリストはすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです」(II コリ 5:15 参照)。

第 VII 章 悪魔の毒牙から救われ、この世の罫から解放された者は、すでに獲得した利益を失わないために、この世に再び引き返そうと望んではならない。

出エジプト記には、ユダヤの民が私たちの影と似姿として前もって描かれています。その保護者であり復讐者である神と共に、ファラオとエジプトの、即ち、悪魔とこの世の最も過酷な奴隷状態に直面したとき、神に対して不忠実、忘恩なこの民は砂漠の孤独と辛い労苦をかえりみながら、モーセに不平をこぼしました。この民は神からの解放と救い〔の恵み〕を悟らずに、再びエジプトへ、即ちすでにそこから脱出してきたこの世の奴隷状態へ、戻ろうと求めました。神は悪魔とこの世からご自分の民を救い、救われた民を保護してくださるのですから、さらに深く神を信じ信頼しなければならぬときに、そうしたのです。彼らは言いました。「一体何をするためにエジプトから導き出したのですか¹⁷⁾。荒れ野で死ぬよりエジプト人に仕える方がましです」。すると、モーセは民に答えて言いました。「信頼しなさい、しっかりと立ちなさい〔恐れてはならない〕。今日、あなたたちのために行われた主の救いを見なさい。主ご自身があなたがたのために清めてくださり、あなたがたは黙するのです」(出 14：11-13 参照)。

主はその福音書の中でこのことを忠告をしながら教えておられます。私たちがすでに放棄し、脱出した悪魔とこの世へ、もう一度戻るようなことのないように、こう言われます。「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」(ルカ 9：62 参照)。さらに、「畑にいる者も帰ってはならない。ロトの妻のことを思い出しなさい」(ルカ 17：31-32 参照)とあります。そして、だれもが富や欲望、自分自身への愛着によりキリストに従うことが妨げられるようなことがないように、付け加えてこう言われます。「自分の持ち物を一切捨てないならば、だれ一人としてわたしの弟子ではありえない」(ルカ 14：33 参照)。

第 VIII 章 勝利の栄冠を獲得するために、信仰と善徳と天上的・靈的恵みの完成成就を力説すべきであり、またそれを堅持すべきである。

歴代誌下には「あなたたちが主と共にいるなら、主もあなたたちと共にいてくださる。もし主を捨てるなら、主もあなたたちを捨て去られる」(代下 15:2 参照)とあります。エゼキエル書には「正しい人の正しさも、彼が背くときには、自分を救うことができない」(エゼ 33:12 参照)とあり、また福音書で主はこう語って言われます。「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」(マタ 10:22 参照)。さらにまた「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」(ヨハ 8:31-32 参照)。

また常に覚悟し、しっかりと準備を整えておかなければならないことを論しながら、主はこう語って言われます。「腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい。主人が婚宴から帰って来て戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ¹⁸⁾」(ルカ 12:35-37 参照)。さらに使徒聖パウロも信仰を深め、信仰を増やし、最高地点に到達するようにと戒めて言っています。「あなたがたは知らないのですか。競争場を走る者は皆走るけれども、賞を受けるのは一人だけです。あなたがたも賞を得るように¹⁹⁾ 走りなさい。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするのですが、あなたがたは朽ちない冠のためにそうするのです」(I コリ 9:24-25 参照)。さらにまた、「神のために兵役に服している者は生計を立てるための仕事に煩わされず、自分を試された者の気に入ろうとします。しかし競技に参加する者は誰であれ、規則に従って競技しないならば、栄冠を受けることができません」(II テモ 2:4-5 参照)とあります。

そしてまた、「兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なるいけにえとして献げなさい。あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただ

き、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようにしなさい」(ロマ 12：1-2 参照)とあります。さらに、「わたしたちがもし神の子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストとの共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです」(ロマ 8：17 参照)とあります。黙示録中にも同じような神からの励ましの言葉が載っています。「あなたの栄冠をだれにも奪われないように、持っているものを固く守りなさい」(黙 3：11 参照)。

この忍耐と持久力の模範として、モーセが悪魔の姿をしたアマレクを倒すために、両手を十字架のしるしに広げて高くかかげたことが出エジプト記中に記されています。彼が十字架のしるしそのまま両手をしっかりとかがけていなかったならば、敵に勝つことができなかつたでしょう。「モーセが手を上げている間、イスラエルは優勢になり、手を下ろすと、アマレクが優勢になった。彼ら [アロンとフル] は石を持ってきてモーセの下に置いた。モーセはその上に座り、アロンとフルはモーセの両側に立って、彼の手を支えた。その手は、日の沈むまで、しっかりと上げられていた。イエス²⁰⁾ (訳注。これはイエス・キリストではなく、モーセのことで、原文に Jesus とあるのは誤字) はアマレクとそのすべての民を斥けた。主はモーセに言われた。

『このことを文書に書き記して記念として、またヨシュアに読み聞かせよ。わたしは、アマレクの記憶を天の下から完全にぬぐい去る』(出 18：11-14 参照)。

第 IX 章 今の苦難や迫害は、わたしたちが試されるためにこそ起きる

申命記に「あなたたちの神、主はあなたたちを試し、心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたたちの神、主を愛するかどうかを知ろうとされる」(申 13：3 参照)とあり、また、ソロモンのもとにも「陶工の器が、かまどの火で吟味されるように、正しい人は艱難の試練で試される」(シラ 27：5 参照。原文中には 2：5 とある)。使徒聖パウロはこの同じことを証明

して語って言います。「わたしたちは神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。そればかりでなく、苦難をも誇りにしています。わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということ。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです（ロマ 5：2-5 参照）。

ペトロもその書簡の中でこう述べています。「愛する人たち、あなたがたを試みるために身にふりかかる火のような試練を、何か思いがけないことが生じたかのように、驚き怪しんではなりません。むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど喜びなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びに満ちあふれるためです。あなたがたはキリストの名のために非難されるなら、幸いです。栄光の霊、すなわち神の霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。彼らによって冒瀆されることが、わたしたちによって崇められるのです」（I ペト 4：12-14 参照）。

第 X 章 迫害の不正や刑罰を恐れるべきではないこと²¹⁾。攻撃する悪魔よりも保護してくださる神のほうが、はるかに偉大な方だから²²⁾である。

ヨハネはその書簡の中でこのことを証明してこう言います。「なぜなら、あなたがたの内におられる方は、世にいる者よりも強いからです」（I ヨハ 4：4 参照）。また詩編 118 編には「人間がわたしになすことを何も恐れない。主はわたしの助け手となってくださる」（詩 118：6 参照）とあり、また「戦車を誇る者もあり、馬を誇る者もあるが、我らは、我らの神、主の御名を称える。彼らは力を失って²³⁾ 倒れるが、我らは力に満ちて立ち上がる」（詩 20：8-9 参照）とあります。さらに悪魔の陣営を恐れるべきではないことを聖霊は力強く教え示しながら、もし敵が戦いを宣言しても、その戦いそのもののうちにこそ²⁴⁾ 私たちの希望があること、そして正しい者はこの戦いにより、神の座席、永遠の救いの報いに到達することを、詩編 27

編中にこう述べています。「彼らがわたしに対して陣を敷いても、わたしの心は恐れぬ。わたしに向かって戦いを挑んで来ても、わたしには確信がある。ひとつのことを主に願い、それだけを求めよう。命のある限り、主の家に宿ることを」(詩 26 : 3-4 参照)。

また、聖書は出エジプト記の中で、苦難においてわたしたちの数は増強されるということを述べています。「虐待されればされるほど彼ら[イスラエルの人々]は増え広がった」(出 1 : 12 参照)。黙示録中には、わたしたちの苦難に対する神の保護が約束されています。「あなたは、受けようとしている苦難を決して恐れてはならない」(黙 2 : 10 参照)。わたしたちに防御や保護を約束する者は、主の他にはありません。主は預言者イザヤを通して次のように言われます。「恐れるな、わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ。水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。大河の中を通っても、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。わたしはあなたの主、あなたの神、聖なるイスラエル、あなたの救い主」(イザ 43 : 1-3 参照)。

主はその福音書中で迫害をうける神の僕には常に神の助けが差し延べられることを約束して、こう言われます。「引き渡されるときは、何をどう言おうかと心配してはならない。そのときには、言うべきことは教えられる。実は、話すのはあなたがたではなく、あなたがたの中で語ってくださる、父の霊である」(マタ 10 : 19 参照)。さらにまた、「前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい。どんな反対者でも対抗できないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである」(ルカ 21 : 14-15 参照。原文には、ルカ 12 : 11) とあります。

出エジプト記にある通り、モーセが人々のもとに行くのをためらい恐れていたとき、主は彼に言われました。「一体誰が人間に口を与えたのか。一体、誰が口を利けぬ²⁵⁾ ようにし、耳を聞こえないようにし、目をみえるようにし、また見えなくするのか。神である主わたしではないか。さあ、

行くがよい。このわたしがあなたの口を開き、あなたが語るべきことを教えよう」(出4：11-12 参照)。神に委ねられた人の口を神が開けることなど、神には何も難しいことではないのです。神に信仰告白した人の言葉に堅忍と信頼を吹き込むことも、神には何も難しいことではないのです。主は民数記(22：28-30 参照)の中で預言者バラムに反対して、雌ロバにさえも話させたのです [主がそのとき、ろばの口を開かれたので、ろばはバラムに言った。『わたしがあなたに何をしたというのですか。三度もわたしを打つとは』」(民22：28 参照)]。

それゆえ、迫害にあっても誰も悪魔がどのような危害を加えるかを考えるのではなく、どのような助けを神がくださるかを、真剣に考えなさい。人間的な敵意によって精神的に動揺することなく、むしろ神のご保護によって信仰を強めなさい。主の約束、そして自分の信仰の功德に従って、自分がいただけると信じているだけの助けを、各人は神からいただくからです。いただく者の信仰がからっぽでないかぎり、全能の神がお与えにならないものなど一つもないからです。

第 XI 章 この世がわたしたちを憎み、敵対し、迫害を起こすことなどは、すでに預言されている。それはこの世で受ける苦難や迫害に、誰も驚いたり、困惑したりすることがないためである。今、キリスト教徒に生じることは、別に新しいことではない。この世の初めから善人が苦しめられ、邪悪な者によって虐待されたり、殺害されたりしてきたのである。

主は福音書の中で、前もって忠告し、こう告げて言われました。「世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい。あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛したはずである。だが、あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである。『僕は主人にまさりはしない』と、わたしが言った言葉を思い出しなさい。人がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するだろう」(ヨハ

15：18-20 参照)。そして「あなたがたを殺す者が皆、自分は神に奉仕していると考える時が来る。彼らがこういうことをするのは、父もわたしをも知らないからである。しかし、これらのことを話したのは、その時が来たときに、わたしが語ったということをおあなたがたに思い出させるためである²⁶⁾」(ヨハ 16：2-4 参照)と主は言われる。

また「はっきり言っておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる」(同 16：20 参照)と言われ、さらにまた「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある²⁷⁾。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」(同 16：33 参照)。キリストの到来のしるしと世の終わりのしるしについて弟子たちが尋ねたとき、主は答えてこう言われました。「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがメシアだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。」(マタ 24, 4 参照)。「戦争の騒ぎや戦争のうわさ²⁸⁾」を聞くだろうが、慌てないように気をつけなさい。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に飢饉や地震や疫病が起こる。しかし、これらはすべて産みの苦しみの始まりである。そのとき、あなたがたは苦しみを受け、殺される。また、わたしの名のために、あなたがたはあらゆる民に憎まれる。そのとき、多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合うようになる。偽預言者も大勢現われ、多くの人を惑わす。悪行がはびこるので、多くの人々の愛が冷える。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。そして、御国のこの福音はあらゆる民への証しとして、全世界に宣べ伝えられる。それから、終わりが来る。

預言者ダニエルの言った憎むべき破壊者²⁹⁾が、聖なる場所に立つのを見たら——読者は悟れ——、そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。屋上にいる者は、家にある物を取り出そうとして下に降りてはならない。畑にいる者は、上着を取りに帰ってはならない。それらの日には、身重の

女と乳飲み子を持つ女³⁰⁾は不幸だ。逃げるのが冬や安息日にならないように、祈りなさい。そのときには、世界の初めから今までなく、今後も決してないほどの大きな苦難が来るからである。神がその帰還を縮めてくださらなければ、だれ一人救われない³¹⁾。しかし、神は選ばれた人たちのために、その期間を縮めてくださるであろう。「そのとき、『見よ、ここにメシアがいる³²⁾』『いや、ここだ』という者がいても、信じてはならない。偽メシアや偽預言者が現れて、大きなしるしや不思議な業³³⁾を行い、できれば、選ばれた人たちをも惑わそうとするからである。気をつけなさい。あなたがたには前もって言うておく。だから、人が『見よ、メシアは荒れ野にいる』と言っても、行ってはならない。また、『見よ、奥の部屋にいる』と言っても、信じてはならない。稲妻が東から西へひらめき渡るように、人の子も来るからである。死体³⁴⁾のある所には、はげ鷹が集まるものだ。

その苦難の日々の後、たちまち太陽は暗くなり³⁵⁾、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる。そのとき、人の子の徴が天に現れる。そして、そのとき、地上のすべての民族は悲しみ、人の子が大いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見る。人の子は、大きなラッパの音を合図にその天使たち³⁶⁾を遣わす。天使たちは、天の果てから果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める」(マタ 24：4-31；ルカ 21：8-28 参照)。

今キリスト教徒に生じている事柄は別に新しいことでもなく、突然のことでもないのです。善良にして正しい者、さらに、清廉潔白な法律と、真の宗教への畏敬の念を持って神に仕える者は、艱難や不正、種々様々な過酷な刑罰を受けながらも、その狭い困難な道を歩み続けて行くのです。このように、この世の初めにおいては、正しい人アベルが兄弟によって初めて殺害されました。その後、ヤコブは逃亡し、ヨセフは売り飛ばされ、憐れみ深いダビドはサウル王から追跡され、神の尊厳を断固として勇敢に主張したエリヤをアハブ王は虐待しようとしてしました。司祭ザカリアは神にいにえをささげていた神殿と祭壇の間で殺害され、自分自身を犠牲にささ

げたのでした。

このように、正しい人々の殉教はこれほどしばしば行われて [祝われ]、後代の信仰と善徳の模範として示されているのです。アナニア、アザリア、ミサエル [訳注。新共同訳では、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴ] という三青年は、同じ年頃で、ここは愛で一致し、しっかりとした信仰と徳を備え、燃え盛る炎や刑罰よりも強靱で、神にのみ仕え、神のみを知り、神のみを礼拝すると叫びながら言いました。「ネブカドネツツアル王さま、私たちは、このお定めにつきましてはお答えする必要はございません。わたしたちがお仕えする神は、燃え盛る炉や王様の手からわたしたちを救うことができますし、必ず私たちを救ってくださいます。もしそうでなくても、ご承知ください。わたしたちは王様の神々に仕えることも、お建てになった金の像³⁷⁾を拜むことも、決していたしません」(訳注。原文には、典拠不掲載。ダニ 3：16-18 参照)。

そしてダニエルは、神への献身と聖霊に満たされて叫んで言いました。「わたしは天と地を造られたわが神、主のほかには誰をも礼拝いたしません」(ダニ 14：4 参照。訳注。新共同訳では、12：13 までで本文が終わっていて、それ以降は掲載されていない。)

トビアも国王の暴君的な奴隷制度の下にあっても、自由な感情と精神を保ちながら神への信仰告白を守り、神の力と神の尊厳を厳かに告げてこう言っています。「わたしは捕囚の地で神に感謝をささげ、神の力と、その偉大さを罪深き民に示そう」(トビト 13：7 参照)。

マカバイの7人の兄弟たちは、その誕生と諸徳において似通っており、秘跡における7という数を完全に成就していますが、彼らの中に何を見出すのでしょうか。これは「7人の兄弟たち」というのは皆、7000年を含む神の計画の最初の「7日」、「7つの霊」と神の眼前で仕えながら往来している「7人の天使」、殉教者の聖なる部屋の「7本のともしび」、黙示録中の「7本の金の燭台」、その上に知恵の家が築き上げられていた、ソロモンの「7本の柱」(箴9：1「知恵は家を建て、7本の柱を刻んで立てた」参照)

のように、殉教にかかわっているのです。さらに、この7人という兄弟たちの数は、「7つの教会」という集合体も包含しており、さらにまた列王記上中に「書いてあるのを」読んでるように、不妊の女が産んだ「7人の子ども」をも表しています。イザヤ書には、「7人の女」が一人の男をとらえて、その男の名前を名乗ることを懇願しています（イザ4：1参照）。

使徒〔聖ヨハネ〕は、この合法的で正確な〔7という〕数のことを覚えていて、「7つの教会」宛に書簡を書き送っています。黙示録（1：19-20参照）の中で、主は神の掟と戒めを「7つの教会」とその各教会の天使たちに教えています。この「7」という数はあの7人の兄弟のうちに見出されるものですが、このような合法的な完成成就をもたらすものです。この7人の子どもと共に結びついているのが母、即ち、源であり根である母なのです。この母が後に7つの教会を産むのです。この母こそは、主の言葉によってペトロの上に³⁸⁾築かれた最初にして、唯一の教会なのです。子どもが苦しみにあうとき、共にいるのは一人母なのです。苦しみによって自らが神の子どもとして試される殉教者は、今や父である神以外のことを考えません。そのことを福音書の中で主は教えてこう言われます。「地上の者を『父』と呼んではならない。あなたがたの父は天の父おひとりだけだ」（マタ23：9参照）。信仰告白を宣言した者は、なんとすばらしい、なんと偉大な信仰の証をしたことでしょう！

敵意を抱くアンティオコス王、このアンティオコスのうちに反キリストが暗示されているのですが（〔II マカ7章以下、7人兄弟の殉教、参照〕）、彼は、負け知らずの信仰告白精神に満たされた殉教者たちの栄光に輝く口を〔禁じられていた〕豚肉の毒で汚そうと試みましたが、激しい鞭打ちの刑罰でも何の効果も得られなかったとき、大きな鉄の鍋や釜を火にかけるように命じました。直ちに火がつけられ、熱せられました。そして、最初に口を開いた者、その徳と信仰の堅固さで王をいっそう激怒させた者の舌が引き出され、切り取られるように命じられ、神への信仰告白を宣言した彼の舌は最初に切り落とされました。こういうことは殉教者には、より光

栄を帯びたものとしてよく起きたのです。神の名を宣言したこの舌こそ、まず最初に神のもとへと進んで行かねばならないのです。

次に、第二番目の者には、もっと過酷な刑罰が考案されました。王は、手足に拷問をかける前に、頭の皮を髪の毛もろとも引き剥がしたのです。これは、明らかに、憎悪によるものです。キリストは男の頭であり、またキリストの頭は神なのですから、殉教に際して頭を拷問するとき、頭における神とキリストを迫害しているのです。しかし、自分の殉教を確信しながら、神の報いについて自分には復活の報いを約束しながら、叫んでこう言いました。「**邪悪な者よ**³⁹⁾、あなたはこの世から我々の命を消し去ろうとしているが、世界の王は、律法のために死ぬ我々を、永遠の新しい命へとよみがえらせてくださるのだ」(II マカ 7:9 参照)。

第三番目の者は、命ぜられると舌を即座に差し出しました。舌の切除という刑罰については、それを軽蔑することを、兄弟 [の模範] からすでに学びとっていたからです。両手も切り落とされるために、勇敢にも差し伸ばしました。主のご受難の模倣として両手を広げて刑罰にかけられる、このような刑罰の方法を彼は、むしろ幸いだと思ったのでした(同 7:10-12 参照)。

第四番目の者は、同じように、拷問を軽蔑する同じ徳を持ちながら、王を制して神々しい声で叫んで言いました。「たとえ人の手で、死に渡されようとも、永遠の命へと神が再び立ち上がらせてくださるという希望をこそ選ぶべきである。だからあなたは、よみがえって再び命を得ることはない」(同 7:13-14 参照)。

第五番目の者は、王の拷問台と種々様々で過酷な拷問を信仰の力によって蹂躪し、神の霊に生かされて将来のことに関する先見的な情報、神の怒りと復讐の接近していることを王に預言したのです。「あなたは朽ちるものであるのに、人々に君臨し、何でも好き勝手なことをしている。しかし、わが民族が神から見捨てられたなどとゆめゆめ思うな。やがてあなたは、神の力の偉大さを思い知るだろう。神はあなたと子孫を苦しみに遭わせる

からだ」(同 7:15-17 参照)。自分の苦しみを考えずに、自分を苦しめている者の報いを預言するとは、なんと殉教の苦しみを軽減したことでしょう、またなんと大きな慰め⁴⁰⁾であったことでしょう！

第六番目の者は、勇気の徳だけでなく、謙遜の徳も賞賛されなければなりません。殉教によって自分に要求したものは何もなく、信仰告白の榮譽を声高らかに語ることもしないで、むしろ自分の犯した罪のゆえに王からの迫害を受け、殉教するのだとしているのです。彼は、後に神が復讐されることを、神に委ねているのです。殉教者は謙遜であること、また復讐については確信をもつこと、苦難においては自慢するものなど何ひとつないことを、彼は教えたのです。「思い違いも甚だしい。我々は我々の神に対して罪を犯したため、このような目に遭っているのだ。[いかなる罰であろうとも⁴¹⁾ 致し方ない]。しかし、あなたは神を敵にしたのだ。ただでは済まないぞ」(同 7:18-19 参照)。

母親もまた賞賛されるべきです。彼女は女性としての弱さに打ち負かされることなく、たくさんの子どもを失っても動揺せず、死にゆく子どもたちを喜びのうちに眺めました。そして彼ら [子どもたち] の死刑を刑罰と見なさず、むしろ光栄と見なしました。[彼女の面前で] その子どもたちが拷問や手足の痛みをもって神に光栄をささげたのと同じように、母親も自分の目の力で [それを見届けることによって] 大きな殉教を神にささげたのです。6人の兄弟が処罰され処刑されたのち、残された一人の息子に対して、王は富と権力と多くの物を約束して、たったひとつのことに従いさえすれば王の残酷さ凶悪さは和らげられると言った。そしてその息子を母も共に説得してくれるように王は頼んだのです。彼女は説得しました。

しかし彼女は殉教者の母となることががふさわしく、また、神とその掟のことを覚えている者となることががふさわしかったのです。そして、彼女は息子たちをやさしく愛するのではなく、勇敢に愛しました。彼女は懇願しましたが、神に信仰告白するように、とでした。彼女は、残りの一人も他の兄弟たちから分かれることのないように、賞賛と光栄を共にするよう

にと懇願しました。その7人の息子の母親であることを考えてみても、その7人の息子をこの世のためでなく、神のために生み出したのです。より幸いな誕生によって息子を産んだ母は、その息子に心構えをさせ励ましながらいいました。「わが子よ、わたしを憐れんでおくれ。わたしはお前を10か月⁴²⁾も胎に宿し、3年間乳を含ませ養い、この年になるまで導き育ててきました。子よ、天と地に目を向け、そこにある万物を見て、神がこれらのものを既に在ったものから造られたのではないこと、そして人間も例外ではないということを知っておくれ。子よ、この死刑執行人を恐れてはなりません。兄たちに倣って、喜んで死を受入れなさい。そうすれば、憐れみによってわたしは、お前を兄たちと共に、神様から戻していただけるでしょう」(II マカ 7: 27-29 参照)。

勇気の徳を激励したことにおいて、この母への賞賛は大きいですが、神への畏敬と信仰の真理においてさらに偉大です。というもこの母親は6人の殉教者の栄誉から、自分にも、息子にも何も約束せず、この兄弟たちの祈りが救いを拒否する者⁴³⁾のために役立つことも信じることなく、審判の日に兄弟たちと共に見出されることができるよう、苦難を共にするように説得した⁴⁴⁾ のでした。その後、子どもたちが続いてこの母親も死にました。殉教者を産み、育て上げた母親が子どもたちと共に栄光の仲間に加えられること、さらに神のみ前に送った子どもたちに自分も続くこと以外に、ふさわしいことは何もなかったのです。

さて、誰かが「証明書」(libelli)とか、あるいは他の物を「偶像に」ささげる機会が与えられた場合、それによって欺くこともできますが、欺く者の弱点を持たないようにしなければなりません。また、エレアザル[訳注。律法学者。高齢。立派な容貌。II マカ 6: 18 以下参照]も沈黙すべきではないのです。彼は、自分には食べることがゆるされていた「清い」肉を、王の役人たち[係]から受取る機会がありましたが、禁じられていたいけにえの内蔵ではなく、王を欺くためにそれを食べたふりをすることもできたのです。しかし[これに対して]、彼は自分の年令、その品位にふさわしくないと云っ

て、他人を躓かせたり誤りに導く、このような人を欺く行為に同意しなくなかったのです。エレアザルは90歳で異教の風習に転向したとか、神の掟を離れ裏切った、かと人々に思われることになるからです。神に背いて、この世での短い命を獲得することで、永遠の罰をこうむることになるのは重大なことなのです。そして鞭と拷問の下で長いこと苦しみを受け、まさに息絶えんとしたとき、彼はうめき声をあげて言いました。「主よ、あなたは聖なる知識を持っておられる。明らかになっている。わたしは死を逃れることもできましたが、鞭打たれ、耐え難い苦痛を肉体で味わっている。しかし、心では、主を畏れ、むしろそれを喜んで耐えているのだ」(II マカ 6:22-30 参照)。彼はアンティオコス王ではなく、審判者である神を畏れ敬まったのは、彼の信仰が誠実なものであり、その徳も完全で純粋であったからです。また、人をあなどったり欺いたりしたら、救いのために何の役にも立たないということを知っていました。

神は私たちの良心の審判者であり、唯一恐れねばならない方です。あなどられたり、欺かれたりすることの全くできない方なのです。それゆえ、もしも私たちが神にささげられ委ねられた者として生きていくなれば、そして昔の、正しい者が歩んだ聖なる足跡を歩んでいこうとするならば、これを私たちの時代の、より大いなる栄光と見なして、私たちも同じ苦難の証し [の道]⁴⁵⁾ を、同じ殉教の苦しみ [の道] を歩んでまいりましょう！昔の人々の模範を数え上げるとき、徳と信仰の実例が余りにも多いので、キリスト教徒の殉教者数は数え切れないほどです。黙示録は証言してこう述べています。「この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、大声で叫んだ。『救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊のものである』。すると、長老の一人がわたしに問いかけた。『この白い衣を着た者たちは、だれか。また、どこから来たのか』。そこでわたしが、『わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです』と答えると、長老

はまた、わたしに言った。『彼らは大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。それゆえ、彼らは神の玉座の前にいて、昼も夜もその神殿で神に仕える』(黙7：9-15 参照)。もしも、キリスト教殉教者の群れがそれほど多いものとして示され、証明されているならば、殉教者の群れが数え切れないほどであるのを目の当たりにするときには、誰も殉教者になることが難しいこと、辛いことだとは思わなくなるでしょう。

第XII章 この世での苦闘や苦難の後に、どのような希望や報いが正しい者と殉教者を待ち受けているか。

聖霊はソロモンを通して預言し、示してこう言われます。「人間の目には懲らしめを受けたように見えても、不滅への大いなる希望が彼らにはある。わずかな試練を受けた後、豊かな恵みを受ける。神が彼らを試し、御自分にふさわしい者と判断されたからである。るつぼの中の金のように神は彼らをえり分け、焼き尽くすいけにえの献げ物として受け入れられた。主の訪れのとき、彼らは輝き渡り⁴⁶⁾、わらを焼く火のように燃え広がる。彼らは国々を裁き、人々を治め、主は永遠に彼らの王となられる」(知3：4-8 参照)。

また同じソロモンはわたしたちの復讐が記され、迫害者や私たちを苦しめる者の罰が述べられています。「[裁きの時、神に従う人は、]大いなる確信に満ちて立つ。彼を虐げ、彼の労苦をさげすんだ者どもの前に。彼らはこれを見て大いなる恐れに捕らえられ、思いもよらぬ彼の救いに茫然自失する。彼らは自分たちの考えの誤りに気づき⁴⁷⁾、胸をかきむしりながら、嘆いて言う。『この者を、かつて我々はあざ笑い、愚かにも、ののしりを浴びせた。その生き方を狂気のさたと考え、その死を恥辱と見なしていた。それがどうして神の子らの一人となり、聖なる人たちの仲間に加わったのか。我々はまことの道を踏み外した。義の光は我々の上に輝かず、太陽も我々のためには昇らなかった。我々は不法と滅びの道をひらすら歩み続け、道

なき荒野を突き進んだ。主の道を知ることがなかったのだ。高慢は我々にとって何の役に立ち、富とおごりは何をもたらしてくれたか。すべては影のように過ぎ去っていった』(知5：1-9 参照。)(訳注。原文には知3：1とある)。

また、詩編 116 編には、苦難の報いについて示しています。「主の慈しみに生きる人の死は主の目に価値高い」(詩 116：15 参照。訳注。原文には 115：3 とある)。また同じ詩編 125 編には、苦難のときの悲しみと報いのときの喜びが現されています。「涙と共に種を蒔く人は、喜びと共に刈り入れる。種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は、束ねた穂⁴⁹⁾を背負い、喜びの歌をうたいながら帰ってくる」(詩 126：5-6 参照。)(訳注。原文には 125：8 とある)。また、詩編 118 編には「いかに幸いなことでしょう、まったき道を踏み、主の律法に歩む人は。いかに幸いなことでしょう、主への殉教を守り、心を尽くして主を尋ね求める人は」(詩編 119：1-2 参照。)(訳注。キュブリアヌスのラテン語原文では、“testimonia eius”「主の定め」の代わりに、“martyria eius”「主への殉教」という表現になっている)とあります。

主は福音書の中で、わたしたちの苦難に対する復讐と、苦しみの報いをこう述べています。「義のために迫害される人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである」(マタ 5：10 参照)。そして、再び「人々に憎まれるとき、また、人の子のために追い出され、ののしられ、汚名を着せられるとき、あなたがたは幸いである。その日には、喜び踊りなさい。天には大きな報いがある」(ルカ 6：22-23 参照)とあり、さらに「[自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、]わたしのために命を失う者は、それを救うのである」(ルカ 9：24 参照)。

神の永遠の報いは、処刑されたり、殺害された人たちだけに約束されているのでありません。たとえ苦難そのものが信徒に欠けている場合であっても、その信仰が完全で不撓不屈のものとして持続するなら、そして自分のあらゆる持ち物を軽視し放棄し、キリストに従うことを明示するキリスト教徒は、キリストご自身によって殉教者の群れに加わる栄誉が与えられ

るのです。このことを約束して、主がこう言われます。「神の国のために、家、畑、両親、兄弟、妻、子供を捨てた者はだれでも、この世ではその7倍もの報いを受け、後の世では永遠の命を受ける」(ルカ 18：29 参照。訳注。「畑、7倍」がキュプリアヌス固有)。

同じように、黙示録に主はこのことを語っています。「わたしはまた、イエスの名と神の言葉のために、殺害された者たちの魂を見た。殺害された者たちを第一の場所に座らせた主は付け加えて言われた。『この者たちは、あの獣もその像も拝まず、額や手に獣の刻印を受けなかった』。それから同じ場所にいたすべての者を見られた主は、彼らを一つにまとめてから言われた『彼らは生き返って、キリストと共に統治した』」(黙 20：4-5 参照。訳注。キュプリアヌス固有の引用箇所を使い方あり)。

キリストと共に生き、共に統治するのは、殺害された人たちだけではありません。自分の信仰のうちに、そして神への畏敬のうちに、しっかりと立って、野獣の像など拝まずに、その邪悪で冒瀆的な布告などに賛成しなかった人ならだれでも [キリストと共に生き、ともに統治するのです。]

第 XIII 章 この世で苦難そのものを耐え忍ぶ以上に、その苦難の大きな報いを受ける

(訳注。この第 XIII 章については、キュプリアヌス自身が書いた上述の「要約」の 12 項目には含まれていない。おそらく「あとがき」として、この第 XIII 章を書いたのかもしれない)

使徒聖パウロは証明しています。神の恩恵によって第三天まで、天国まで引き上げられた彼が、そこで言い表し難い言葉で聞いたことを証言しています。そこで、信仰によって主イエスを見たということを誇りにしながら、より偉大な真理を自覚することによって、学んだこと、見たことをこう証言しています。「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないとわたしは思います」(ロマ 8：18 参照)。

従って、この世での拷問や処罰の後に、キリストと共に直ちに喜ぶために、また、神の報いをいただくために、全力を尽くして、神の友となるという、これほどの栄光を受けようと努力しない者がいるでしょうか。この世の兵士が敵を倒して祖国に凱旋するとき、そのときこそは栄光に満ちているのであれば、なおさらのこと、悪魔を倒し、天国へと凱旋する者の栄光は、どれほど偉大ですばらしいものなのでしょうか。それは、アダムが罪びととして退けられたその場所に、勝利のトロフィを返還すること、つまり彼を倒した者を倒し返すことによって、神に対して最も受け入れられる献げ物——即ち、不滅の信仰と揺るぎない精神力、輝かしい賛美のわざ——をささげることになるのです。それは、神が敵どもに復讐を与えるために到来されるとき、彼も主に随行すること、審判の玉座に座られるとき、彼も主の側近くに立つこと、キリストとの「共同の世継ぎ」となること、天使たちと等しいものになること、そして、太祖、使徒、預言者たちと共に、天の国を所有することを喜び合うことではないのでしょうか。

このような考え方は、迫害に勝利できるものではないでしょうか。拷問を耐え忍ぶことができるものではないでしょうか。宗教的な黙想に根ざした勇敢で堅固な信仰〔者〕は耐え忍びます。将来の事柄に関しても、確固たる信仰によって鍛えられた精神は、悪魔のあらゆる恐怖に対しても、この世の威嚇に対しても、不動のままとどまるのです。この世の迫害によって、雲がかかっても、天空はあいているのです。反キリストが威嚇しても、キリストは守ってくださるのです。死がもたらされますが、不滅が続くのです。殺害によってこの世からは取り去られますが、呼び戻された者には天国が備えられるのです。この世の一時的な命は消え去りますが、永遠の命⁴⁹⁾が与えられるのです。

この世からの喜びのうちに出ていくこと、苦難と艱難のさなかより栄光のうちに出ていくことは、どれほど偉大な品位であり、またどれほど大きな安らぎでしょうか。今まで見てきた人々やこの世も、一瞬目を閉じて再び開けてみると、もう神とキリストがそこに見えるのです！ これほどの

素早さ、これほどの幸いな移住があるでしょうか！ あなたは突然この世から取り去られ、天国に据えられるのです。

こういうことを日夜、心に抱き、思い巡らし黙想しなければなりません。もしも神の兵士にそのような迫害が襲いかかってきても⁵⁰⁾、彼の迅速な戦闘能力は決して打ち負かされないでしょう。あるいは、もしも神からの「呼出し」が早く到着しても、すでに殉教に向かって準備を整えていた信仰にとって、報いがなくなるようなことは決してありません。時間の浪費などを伴わずに、報いの神は、必ず報いを与えられるのです。迫害においては戦うことが、平和においては[清らかな]良心が、栄冠として与えられるのです。(以上、キュプリアヌス著『殉教のすすめ』全13章、おわり)

3. おわりに

1. 殉教の模範。キュプリアヌスの殉教のありさま

ヴァレリアヌス皇帝によって西暦257年から始められた新しい迫害により、キュプリアヌスは258年9月14日カルタゴの近くで、輝かしい殉教をとげた。迫害のさなかにあっては、信徒を慰め励まし、自ら信仰の証しの手本を示すことは牧者の第一のつとめであった。「聖キュプリアヌス司教の殉教に関する公式記録⁽⁸⁾」の最後の部分には次のように記されている。

「9月14日の朝、総督ガレリウス・マキシムスの命によって、大群衆がセクトゥスの別荘に押し寄せた。一方、同総督は、これと同日に、キュプリアヌスを自分のもとに連行するように命じた。

総督ガレリウス・マキシムスは、キュプリアヌス司教が連行されて来た

(8) Acta Proconsularia Sancti Cypriani Episcopi et Martyris. 引用箇所は、キュプリアヌス著・熊谷賢二訳『偉大なる忍耐・書簡抄』上智大学神学部編(創文社、1965年)；A・アマン著・家入敏光訳『教父たち——生涯と作品入門』(エンデルレ書店、1972年)；拙稿「アフリカの司教殉教者キュプリアヌス(2)」『南山神学』第9号(1986年)参照。

とき、『タキトゥス・キュプリアヌスはおまえか』と尋ねた。キュプリアヌス司教は、『そうです、私です』と答えた。

総督は言った、『おまえは、不敬な者どもに加担して彼らの司教になったのか』『はい、そうです』とキュプリアヌス司教は答えた。

総督は言った、『至聖なる皇帝がたは、おまえがいけにえをささげるように命令されておられるのだ。』『そうするわけにはまいりません』とキュプリアヌス司教は答えた。

総督ガレリウス・マキシムスは言った、『自分の身のためだ。よく考えてみよ。』キュプリアヌス司教は答えた、『あなたは、自分に命じられている通りにおやりなさい。これほど明瞭なことをいまさら愚考するにもおよびますまい。』

総督ガレリウス・マキシムスは、議員たちと評議し、不承不承次のような判決を下した。『おまえは、長い間、背神的な精神をもって暮らし、多くの不敬な共謀者どもを集め、ローマの神々と神聖な宗教に敵対してきた。慈しみ深くいとも神聖なる皇帝ヴァレリアヌス・アウグストゥス陛下、ガリエヌス・アウグストゥス陛下、また、いとも尊くあらせられるヴァレリアヌス・カエサル陛下も、おまえを自ら信奉される宗教に立ち返らせることはできなかった。従って、おまえが、最も邪悪な罪業の発起人、煽動者であることが判明した。そこでおまえは、おまえの罪によってかり集められた者どものよいみせしめとなるのだ。おまえが血の罰を受けることによって、この国の掟を固めるのである。』

こう言って、総督は最後に、板に書かれた判決文を読み上げた。『タキトゥス・キュプリアヌスは、剣によって処刑されるべし。』

キュプリアヌス司教の答えはただ一言、『デオ・グラチアス！』（『神に感謝！』）という言葉であった。

この有罪判決を受けたキュプリアヌス司教は、直ちに処刑場に連れて行かれた。彼は自分のマントを脱ぎ、次いでダルマティカを脱いで、それを助祭に渡した。彼はただ亜麻布の下着を着けていただけだった。やがて彼

は跪き、長い祈りに没頭した。彼は王者のような気前のよさで、金貨 25 枚を刑吏に手渡した。彼は自分で目隠しの帯の結び目を作り、最後の犠牲をささげるために、一人の司祭と助祭の手で縛ってもらい、致命の一撃を受けたのだった。

さらに、この「公式記録」によれば「キュプリアヌス司教に死刑の判決が下ると、多くのキリスト教徒が『われわれも彼といっしょに首を斬られよう！』と叫びながら、処刑場まで彼のあとに従った行った」とある。このことから、キュプリアヌスは司教として自分に委ねられた信徒の群れのために尽くし、どれほど愛され慕われいたかがうかがえる。

このたび、上記の「キュプリアヌスの殉教のありさま」を 10 数年ぶりで読み返してみても、聖書の言葉や模範事例をまとめた『殉教のすすめ』という彼の理論面と、その見事な実践の模範を目の当たりにして、少なからず感動をおぼえた。聖キュプリアヌスの遺徳を称えると同時に、その勇気ある模範に感謝し敬意を表する次第である。

2. 日本 26 聖人殉教者の「至福の丘」

1981 年 2 月 26 日、ローマ教皇ヨハネ・パウロ II 世が長崎・西坂の丘「26 聖人殉教地」を巡礼した際、この丘を「至福の丘」と名付けられた。キュプリアヌス著『殉教のすすめ』の研究を終えるにあたり、私たち日本人にとって関連の深い、そのメッセージを抜粋の形でここに掲載し、記憶にとどめておきたい。

「きょう、私は巡礼者としてここに参りました。26 聖人殉教者とそのあとに続いた多くの人びとは殉教者、とくにこの度、列福されたキリストのお恵みの英雄たちの生涯と死をたたえ、神に感謝をささげるためにここに参りました。『もし一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それは一粒のまま残る。しかし、死ねば、豊かに実を結ぶ』（ヨハネ 12：24）。

キリスト信者は長崎で死んでいきました。しかし、長崎の教会は死ぬこ

とはありませんでした。姿はかくさざるをえませんでした。キリストの教えは親から子に伝えられて、教会が公になる日を待っていました。

この殉教者の丘に基礎をおく長崎の教会はいずれ成長し、花を咲かせ、世界のキリスト信者に対し信仰と忠実の模範となり、復活したキリストに基づく希望のしるしとなったのです。私はこの生なる地を”至福の丘”と名付けます⁽⁹⁾」。

さらに、この度、次のような「日本 26 聖人殉教 400 年記念の祈り」が作られた。

「東洋の小さな国日本に、福音の種をまかれた父と子と聖霊に、賛美と感謝をささげます。 蒔かれて実り、 実って刈られ、 麦の一粒

日本 26 聖人殉教者よ、これがキリストのために命をささげた、あなたがたの生涯でした。京都から長崎への道のりには、国籍、階級、年令の区別さえ感じられません。ただ動かぬところへ行くための動きだけがみられます。

日本 26 聖人殉教者よ、地に落ちて実を結ぶ一粒の麦となれるように、私たちが力づけてください。殉教者の血で肥沃になったこの土地にも、疲労の色が見えはじめました。26 聖人殉教 400 年を記念するわたしたちが、福音のために働くことができるように取り次いでください。アーメン」。

3. 殉教の精神に生きる。

日本カトリック司教協議会は、聖年準備特別委員会（白柳誠一・委員長）の名のもとに教区司教各位宛に、1996 年 11 月、「大聖年をよりよく過ごすために——殉教者の意味を考える——」という文書を送付した⁽¹⁰⁾。その中から重要なメッセージを私なりに選択し、今回のキュプリアヌスの『殉教

(9) カトリック長崎大司教区発行『日本 26 聖人殉教 400 年祭』のしおり参照

(10) 「大聖年をよりよく過ごすために——殉教者の意味を考える——」日本カトリック司教協議会・大聖年準備特別委員会（白柳誠一・委員長）、1996 年 11 月 9 日付文書。

のすすめについて』の研究と、「殉教の精神に生きること」の考察のまとめにしたいと思う。

「私たち信仰者も、イエスの模範と殉教者の生き方に励まされて、自分の苦しみ、自分の生命そのものをささげるように招かれています。侮辱、孤独、嘲笑、人生の苦しみなどを信仰の精神をもって受入れ、ゆるし、孤独に耐え、他人のために祈り、他人を助ける生き方を目指すことが大切です。殉教者を敬うとは、自ら殉教の精神を生きることを表しています。」(「イエスは殉教者の原型」の項より)。

「日本の殉教者は何よりも教会の生活、特に聖体祭儀と悔い改めの秘跡を大切にしました。殉教者に倣うとは、教会の秘跡を大切にし、それを自分の生活に活かすことにあります」と、秘跡中心の生活を人々に奨励している(「殉教は救いの計画の実現」の項より)。

「現代社会の矛盾の中でも真面目に人生の意味を探し、弱い人々の立場に立って自分を忘れて献身している人々がいることは大きな慰めですが、反面、日本の社会には安楽な生活、遊興を求めるあまり、人生の意味を見失う危険にさらされている人々が多くいることも事実です。大切なことは信仰者一人ひとりが、召されたそれぞれの道に従ってイエスに倣い、よりよい社会の建設のために最善をつくすことなのです」(「殉教は聖人になる道」の項より)。

「殉教者を過去の偉人にしてはいけません。また、政治上の必然的な犠牲者にしてもなりません。自らの生と死を「イエスの名」のために選んだ聖人であることを留意しましょう。特にわが身を振り返って、襟を正す生活に向かっていくことにより、大聖年の準備と祝典の中で殉教者を祝う意義をはっきり意識するように務めましょう」(「おわりに」の項より)。

最後に一言。本書の翻訳研究の仕事で最後の仕上げをしていた頃、「神の愛の宣教者会」の創立者マザー・テレサが死去された(1997年9月6日、

87歳)。彼女の卓越した信仰・希望・愛、貧しさに徹した生涯、貧しい者との連帯、その隣人愛と奉仕の模範こそは、宗教・政治・人種・国境・貧富の差等、人間同士が壁を築きがちな、あらゆる差別の壁を乗り越え、一人ひとりにおよぶ神の愛のすばらしさを具体的に示した点で、今世紀最大の「信仰の証人」であり、まさに「殉教者」と呼ぶに相応しい聖者であった、と思う。

1984年11月24日、マザー・テレサが名古屋・南山学園を訪問され、学園講堂で英語の講演を2回された、2回目に私も参加した。彼女の迫力のあるメッセージに感動し励まされた人々、勇気づけられた人々も、少なくないであろう。あの小さなお姿と、力強い声の響きと共に、あのメッセージはがはっきりと今も脳裏によみがってくる……。

「神は私たちがたいへん愛しておられるので、おん子イエズスをこの世にお遣わしになり、私たちにより知らせを与えてくださいました。それは、神は愛であり、私たちが愛しておられること、神が私たちが愛しておられるように、私たちも互いに愛し合うように、という知らせです⁽¹⁾。」

注

ステファノ・バルジウスによるラテン語原文に関する「脚注」合計50か所の要旨。長文の場合は簡略にし、()内にその行数を提示してある。

- 1) 本書がキューリアヌスの著作であることについての説明(40行分)
- 2) nunc(いま)より、jam(すでに、これまで)のほうが適切である。
- 2') [この番号の付け方は、原文のまま。追加したもの]

(1) “Love in action!” マザー・テレサ・イン・ナゴヤ, 1984. 11. 24. (音響映像作成の録音テープ518, 冒頭部分より。通訳: 田中良子先生, 南山短大)。1997年12月、ペルーのシブリアニ大司教の講演と共に、小冊子として出版された(神言会宣教事務局 編)。

Imparatum militem. 「武器を装備していない兵士」「無防備の～」

- 3) Christo adhaerens. 「キリストに従いながら」。この文章はほとんどすべての古い写本に掲載されている。
- 4) baptisma maius. 「より偉大な洗礼」。即ち、「血の洗礼」(殉教)を指す。
- 5) elementa. 「諸要素」については、後続の第I章中に説明がある。
- 6) injurias et paenas. 「不正と処罰」。写本によっては、injurias et pugnas. 「不正と戦い」となっている。
- 7) Quod idola. 「偶像は……」以下、各章冒頭の「要約」は、キュブリアヌス自身が欄外に新たに付けたものであり、それに「聖書からの証明」が続く構成になっている。写本によっては、そうになっていないものもあるが、本書ではこの「要約」も付記してある(21行分)。
- 8) aut lunam. 「月も」。ここでは「天において光り輝くもの」即ち、「太陽も、月も」の意味。
- 9) Qoud Deus solus. 「神のみ」という3つの単語が、旧約聖書等にも載っている場合が多いので、ここでも記載されている(説明文18行分)。
- 10) metuite potius. 「神を畏れよ」。たいていの写本にはmetuiteという単語の代わりに、timete「恐れよ」とある。
- 11) Deos aureos. 「金の神」。5つの写本には、et argenteos. 「銀の神も」と続く。
- 12) Si audieris in una. 「うわさとして……聞いたならば」。「キリスト到来以後、悪人は死刑によって処罰されるべきであるか」という問いかけに対して、キュブリアヌスは「キリスト到来以前において、申命記の権威やマラキアの模範によって、そうすべきである」と証明したうえで、「キリスト到来以後ならばなおさらのことである」としている。
- 13) conservabit illam. 「それ(生命)を保って……」の箇所、写本によっては、salvabit「救うであろう」、またはservabit「保つであろう」、またはinveniat「見出すであろう」となっている。
- 14) non sit me dignus. 「わたしにふさわしくない」が、non est meus discipulus. 「わたしの弟子ではない」となっている写本もある。
- 15) occidimur. 「わたしたちは死にさらされている」という箇所が、「殺される」を意味する、mortificamur (mortifico, are. の受動態)となっている写本もある。
- 16) superamus. 「わたしたちは……勝利を取めている」という単語の代わりに、supervincimus. 「わたしたちは……打ち勝っている、征服している」という意味の単語になっている写本もある。
- 17) in ejiciendo. 「放置することで」の代わりに、educendo「導き出すことで」となっている写本もある。
- 18) Felices servi. 「……する僕たちは幸いだ」の文章中、Beati servi. となっている写本もある。

- 19) ut occupetis. 「(賞を) 得るように」。このあとに、写本によっては、次の一文、
Omnis enim qui agonizat, contentus est. 「苦しむ者は皆、熱心に努めているのです」が掲載されている。
- 20) fugavit Jesus. 「イエスは……斥けた」の箇所は、fugavit Moyses. 「モーセは……斥けた」とある写本のほうが、内容的にみて正しい。
- 21) Timendas non esse. 「恐れるな」という文章は、写本によっては、掲載されていないが、古い写本にはすべて掲載されている。
- 22) quia major est Dominus. 「神のほうが偉大な方」という表現は、ルフィヌス (Rufinus, lib. 1, Hist. eccl. cap. 34.) および詩編 62 編中にも言及がある。
- 23) ipsi obligati sunt. 直訳「彼らは拘束されて」「力を失って」という文章は、より古い写本に掲載されている。
- 24) congressione illa. 「その戦いそのもののうちに」という文章は、congressionem illam justorum. 「正しい者たちの～」となっている写本もある。
- 25) mogilalum. 「口のきけないもの」という単語は、別な写本には、mollegium とある。ギリシャ語 mogilalon モギラロンとの関連 (15 行分)。
- 26) memores sitis. 「あなたがたに思い出させる」という単語は、別な写本では、ほぼ同義の reminiscamini. が記載されている。
- 27) in saeculo autem pressuram. 「……この世で苦難が……」という文章には、「ある」を意味する単語 habebitis が続いている写本もある。
- 28) bella et auditus. 「戦争とうわさ」という文章では、bella et opiniones bellorum 「戦争と戦争のうわさ」となっている写本もある。
- 29) vastationes. 「破壊(者)」という単語の代わりに、desolationis 「荒廃」としてある写本もある。ダニエル書 9 章、ヨハネ福音書 13 章の中でも同じような表現が用いられている。
- 30) nutrientibus. 「乳飲み子を持つ女」という単語が、nutricantibus 「～を育てる女」となっている写本もある。
- 31) (non esset) salva omnis caro. 「だれ一人救われない」という文章は、別な写本では、別な動詞を使用して、(non) liberaretur omnis caro. となっている。
- 32) hic est Christus. 「ここにメシアがいる」という文章については、エラスムスのマタイ福音書注解参照。
- 33) prodigia. 「不思議な業」という単語は、別な写本では、portenta. 「不思議なしるし」となっている。
- 34) cadaver. 「死体」という単語の代わりに、corpus. 「遺体」がここでは適当であるが、多くの写本には cadaver が使われている。また、colligentur 「集まる」も、異なる動詞 congregabuntur となっている写本がある。
- 35) tenebrescet. 「暗くなる」という単語も、他に、tenebricabit 「暗くなる」、または、tenebricabitur 「暗くなる」という形になっている写本がある。

- 36) cum tuba magna. 「大群衆と共に」という文章も、他に、cum virtute magna et claritate 「大きな力と輝きを伴って」となっている写本もある。
- 37) imaginem. 「像」という単語のかわりに、statuam 「立像」もある。
- 38) super Petrum. 「ペトロの上に」という単語のかわりに、super petram 「岩の上に」という写本もある (16行分)。
- 39) impotens. 「無能な者」とは実は「邪悪な権力者」に向けられた皮肉な言葉で、この箇所では「邪悪な者よ」と訳出した。他に、quia potens est. 「力ある者」という写本もある。
- 40) quam magnum. 「なんと大きな」という単語が、ほとんどの古い写本には掲載されている。
- 41) impunitum. 「罰を受けないもの」という単語が、ほとんどの古い写本には掲載されている。
- 42) mensibus decem. 「10 か月」の他に、mensibus novem 「9 か月」という写本もある (62行分)。
- 43) adnegantis. 「(救いを) 拒否する」の綴りの他に、ほぼ同じ意味の、abnegantis とする写本もある。
- 44) persuasit potius. 「……説得した」。このことについて、ヒエロニムスの著作 (Cf. Epistola, De honorandis parentibus.) に説明がある。
- 45) per eadem passionum martyria pergamus. 「同じ苦難の殉教の道を歩んでまいりましょう。」という文章のほかに、ad martyrii gloriam pergamus. 「……殉教の栄光への道を～」、または、ad martyrii passionem pergamus. 「……殉教の苦しみの道を～」という表現の写本もある。
- 46) fulgebunt. 「彼らは輝きわたり」という単語で、コンマ (,) 区切りを入れている写本が4つある。
- 47) paenitentiam habentes. 「あやまちを後悔しながら (誤りに気づき)」, という表現が古い写本に掲載されている。
- 48) gremia sua. 「自分の・束ねた穂」という単語の他に、manipulos suos. 「自分の・一握みの束」という写本もある。
- 49) aeterna reparatur. 「永遠の(いのち)が与えられる」という表現の他に、aeternitas repraesentatur. 「永遠性が与えられる」という写本もある。
- 50) Si talem persecutio. 「もしも……そのような迫害が」という表現の他に、Si talem persecutionis dies Christi invenerit militem. 「もしも……そのような迫害の日がキリストの兵士に襲いかかってきても」という写本もある。